

東京都立南多摩中等教育学校を訪問して

2010年から中高一貫校に改組された南多摩中等教育学校を佐賀と後藤が訪れ、同校が進める探究活動の先進的取り組みの視察を行いました。中高一貫校の強みである長期的な教育の柱として探究的活動の取り組みを実施されています。中学校1年生から高校2年生の間に生徒につけさせたい資質、能力が掲げられ、それを達成させるための具体的な取り組みが全校で共有されています。また、その取り組みを行うための教材（教員用、生徒用プリント、カリキュラム）が作られていました。

<中学生段階>

始めに中学生段階での探究的な取り組みを紹介します。中学校1年生では地域学習、2年生では文系中心、3年生では理系中心の科学研究を行っています。取り組みは総合的な学習の時間内で行っています。校外学習、発表会の日は特別に設定してあります。取り組みの中では、生徒が現場（フィールド）に行ったり、実際に手を動かしたりすることを大事にされていました。調査のための計画、許可申請、担当者との打ち合わせ等はすべて生徒が行い、ソーシャルスキルトレーニングの機会として活用されています。

<高校生段階>

次に高校生段階での取り組みを紹介します。高校1、2年生では自ら興味がある分野の仮説検証型の研究を行います。活動は総合的な学習の時間内で行っています（水曜日の5時間目）。高校生からは、生徒は基本的には自身が所有するスマートフォンやパソコン、タブレット端末を用いて探究活動に取り組んでいます（BYOD 研究推進校にもなっています。AI「Knewton」を用いた学習も進めています。BYODとはBring Your Own Device）。Teaching Assistantとして都内の大学院生（2500円/時）が補助に入り、仮説検証の具体的な進め方、問題の議論等は担当教員ではなく、主としてTAが行います。11分野中10分野でTAが配置されており、学校で導入しているClassiを用いて日常的にTAと議論できます。教員は全体の管理者として働き、評価も行います。「がむしゃら」に一つの課題に向かって研究を進められる環境整備に努めている印象を受けました。発表は首都大学東京で行います。高校2年生では4000字の論文を書くことが最終目標である。探究的な活動は高校2年生で終了し、3年生は受験勉強に向かいます。

<印象深かったこと>

- ・探究活動を推進する専門の分掌があり、各学年1名+部長で構成されています。部長の先生は、探究的な活動に積極的に取り組む同校を立ち上げるために、開学前2年間都教委に所属し、具体的な運営方法について研究、準備していました。
- ・探究活動が円滑に運営できるようになったのは、取り組み始めて7、8年経ってから。
- ・中学生に調べ学習先の計画やアプガ取りを任せることで問題はいくつか出るが、そのために事業を中止するというのではなく、それよりも得られるものが大きいために継続できていると感じました。

- ・高校2年生では4000字の論文を書くことが最終目標であるが、これは中学生段階から探究活動の度に論理的な文章を書かせる課題を課しているから達成可能であると感じました。
- ・生徒は部活動や課外活動を楽しみにしており、学習に取り組む時間も確保するために、探究的な活動は総合的な学習の授業時間内で完結させられるように意識していました。
- ・仮説検証型の研究テーマを探すのがとても難しいが、自分の興味があるテーマをまず1つ考え、そこからサブテーマを30個考え、その中のいくつかのテーマに取り組むことでより深い探究ができると感じました。
- ・文系の学問分野では仮説検証型のテーマは難しく思えるが、30個のサブテーマの中から複数のデータが得られ、何らかの観点から比較できるテーマを選ぶとよい。
- ・探究的な活動で利用するタブレット端末、プロジェクター、TA費用等の大きな予算は都や国の教育事業に応募して獲得しています。探究活動継続には予算獲得が必要であると感じました。
- ・入学試験は学力試験ではなく、適性試験であり、学力層の幅が広いです。それに対応するために、多くの宿題を課しており、毎日50分授業の6時間、通塾率は高くないとのことでした（探究部長の話）。

<多治見高校で探究的活動を進めるためには>

現在のゼミ学習を発展させていくことが合理的だろうとは思われます。まずは探究的活動を通して身につけさせたい力を絞り、それを伸ばす基本的な指導方法及び教材を作り、職員間で共通認識をもつことが必要だと考えました。

本校が重点的に取り組むためには、現状の業務の片手間になってしまう恐れがあるので、担当組織にしっかりと余裕を持たせ、時間と労力をかけられるような体系を整える必要があると感じました。

The image shows a page from a school guide titled "日本の教育を革新する南海岸の真髄 推進校・指定校" (The True Essence of the Nankai Coast Innovating Japanese Education: Promoted Schools and Designated Schools). The page is part of the "Diverse Link Tokyo Edu (DLTE)" project. It lists four categories of schools:

- 1 BYOD研究指定校** (BYOD Research Designated Schools): Schools that have implemented BYOD (Bring Your Own Device) and are participating in research. Schools listed include: 聖光学院高等学校, 聖光学院高等学校附属中学校, 聖光学院高等学校附属小学校, 聖光学院高等学校附属幼稚園, 聖光学院高等学校附属保育園, 聖光学院高等学校附属認定こども園, 聖光学院高等学校附属特別支援学校, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級.
- 2 知的探究イニシアチブ推進校** (Knowledge Inquiry Initiative Promoted Schools): Schools that are promoting knowledge inquiry initiatives. Schools listed include: 聖光学院高等学校, 聖光学院高等学校附属中学校, 聖光学院高等学校附属小学校, 聖光学院高等学校附属幼稚園, 聖光学院高等学校附属認定こども園, 聖光学院高等学校附属特別支援学校, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級.
- 3 進路リーディング校** (Career Leading Schools): Schools that are leading in career guidance. Schools listed include: 聖光学院高等学校, 聖光学院高等学校附属中学校, 聖光学院高等学校附属小学校, 聖光学院高等学校附属幼稚園, 聖光学院高等学校附属認定こども園, 聖光学院高等学校附属特別支援学校, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級.
- 4 英語教育推進校** (English Education Promoted Schools): Schools that are promoting English education. Schools listed include: 聖光学院高等学校, 聖光学院高等学校附属中学校, 聖光学院高等学校附属小学校, 聖光学院高等学校附属幼稚園, 聖光学院高等学校附属認定こども園, 聖光学院高等学校附属特別支援学校, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級, 聖光学院高等学校附属特別支援学級.

(文責：佐賀)

エコ1 グランプリ最終審査出場 研究専門部門にて“内閣総理大臣賞”を受賞！

12月7日(土)に東京ビッグサイトにて行われたエコワン1グランプリ(イオン・毎日新聞社主催・内閣府等後援)最終審査会に土岐川ゼミを代表して2年生山本ひなたさんと後藤優斗君が参加しました。

エコ1グランプリは次代を担う高校生が日ごろ学校単位で取り組んでいる「エコ活動」を募集し、環境への意識がより高まり、多くの学校でエコ活動がさらに広がることを目指しています。今回は“研究専門部門”で出場しました。応募総数117校、全140テーマ(普及部門65テーマ・研究テーマ75テーマ)の中から14校が最終審査会にて発表を行いました。最終審査は発表5分質疑応答10分でした。土岐川ゼミの発表は全体で10校目であり、発表は緊張感のある雰囲気の中で行われました。今までやってきた活動内容・実験結果・考察・今後の展望に関してしっかりと制限時間内で発表を終えることができ、練習の成果を十分に発揮することができました。質疑応答では、審査員の質問をしっかりと聞き、言葉に詰まりながらも自分の言葉で明快に答えることができました。結果として賞のトップである内閣総理大臣賞を受賞することができました。表彰式後の懇親会で審査員の方から質疑応答の受け答えについてお褒めの言葉を頂き、受賞に大きく繋がったという話も聞くことができました。今回のエコ1グランプリを通じて、しっかりと話を聞き、それに対して自分の言葉で答えるということの重要性を再認識することができました。



感想

・最終審査ということで、とても緊張しました。著名な審査員の方や同じような活動を行っている全国の高校生の前で発表し、質疑応答を受けるということはなかなか無いので、とても貴重な経験となりました。この経験を自分の糧とし、今後も研究活動に取り組んでいきたいです。

(山本ひなた)

・自分たちが行ってきた小さな自然再生を、エコ1を通じて全国の高校生に伝えることができ、とても良い経験となりました。全国の高校生の生物・環境保全に関する取り組みなど、様々な活動を知ることができて、非常に有意義な1日となりました。(後藤優斗) 文責：杉本真弥

多治見の町づくり活性化プロジェクトゼミ

当ゼミは2年生19名で活動しており、多治見市まちづくり株式会社と協力し、

12月21日(土)にながせ商店街でのイベント開催(本校ゼミ独自)を目標に活動しています。

ゼミでは、「ながせ商店街に人呼ぶ」「ながせ商店街をもっと知ってもらう」という目標を掲げ取り組んできました。そこで、ゼミを2つのチームに分け「多治見カフェ」と「クイズラリー」を行うことにしました。

「多治見カフェ」とは、ながせ商店街にある飲食店から人気のメニューを分けてもらい、一皿に盛り合わせ、その一皿でたくさんのお店の良さが堪能できるようになっています。料理の種類、値段設定、飲食店への許可、催しをするための場所の決定、キッチン利用方法、看板やキャラクター作成、店内の装飾などやるべきことはたくさんありました。しかし、まちづくり株式会社のご協力もあり、生徒たちはひとつひとつにアイデアを出し合いました。

「クイズラリー」は、ながせ商店街を題材にしたクイズを実際に歩きながら考えていくコーナーです。こちらはただクイズにするだけではなく、お店のことをもっと知ってもらえるように工夫を凝らし、「どうしたら子供から大人まで楽しんでもらえるのか」、「どうしたらながせ商店街に興味を持ってもらえるのか」を深く考えてきました。そのひとつの方法として多治見市のマスコットキャラクター「うながっぱ」にお手伝いをしてもらうことにしました。

さらに、事前の宣伝としてどちらもポスター、チラシ、Instagramを活用しています。多くの生徒たちの目に留まるように工夫を凝らしました。

生徒たちはひとりでも多くの方のお越しいただけるよう願って活動しています。どちらのチームも目的のためにたくさんアイデアを出し合い、自分たちが楽しみながら活動しています。先生方もお手すきであればぜひご参加いただければ幸いです。

ちなみにですが、来年多治見を舞台にした漫画「やくならマグカップも」のアニメ化が決まっており、そのPR活動に本校のゼミ学習が携われないかを考えています。(文責：後藤佑)



静岡県立沼津西高等学校 総合的探究の時間「探求と表現」 1 年生「沼津活性化プロジェクト」成果発表会視察

1 沼津西高校概要

創立 119 年を迎える地域の伝統高であり、平成 15 年までは女子高であった。沼津東高校に次ぐ地域の進学校(国公立大進学者は約 30%)でもある。県内唯一の芸術科が 1 クラスあり、1 学年普通科 5 クラス芸術科 1 クラスという編成となっている。前身が女子高、地域の進学校など本校と重なる部分が多い学校である。



沼津市に新しい大学を！という発表を行っている様子

2 沼津活性化プロジェクトについて

沼津市は現在人口減少が顕著であり、危機感を募らせているということである。また沼津駅前にある仲見世商店街もシャッター街にありつつある。この現状に対し、①環境②観光③産業④教育⑤防災⑥福祉の6つの観点から、沼津西高校が高校生の目線で沼津市を活性化する方法を考え、行政等に対して働きかけを行うことを目的にした活動であった。生徒は3～5人で1班となり、各クラスに振り分けられた分野に関して班ごとにテーマを定め、現状の視察や行政・市民へのインタビュー等を行い、活性化へ向けた問題提起を考え、あらかじめクラスごとに発表し、代表を決めた。各クラスの代表班と教員推薦の班が発表会で発表した。各分野それぞれに行政が関与し、アドバイザーの役割を果たし、直接生徒と多くの意見交換を行ってきたとのことであった。実際発表会には沼津市議会議員、商工会議所、市内中学校などから多数の参加者があり、特に沼津市役所からは 10 名の方が参加するなど、関心の高さが窺えた。

3 沼津活性化プロジェクトのポイント

沼津西高校の副校長・教頭・教務主任・1 学年主任の先生方と面談をさせていただいた。以下に活動のポイントとなっている点を挙げる。

- ① 学年主任の強いリーダーシップ：今年度は行政とのパイプ役はすべて学年主任が担い、事前に電話連絡を行い活動協力の内諾を得ていた。しかし、これは学年主任の負担が大きく、継続的なものにできるかどうかは未定とのことであった。

- ② 生徒自身の主体性の育成：研修先とのアポイントメント・発表会準備・当日の司会進行など、全ての面で生徒主体で活動を行うよう指導した。
- ② 探究の時間を丸 1 日確保：1 日探究の時間を確保し、市内外の事業所・行政へフィールドワークに出向き、実際に目で見て耳で聞くという活動を行った。（各自自転車や電車を使って移動したとのことであった）
- ③ 発表方法の工夫：以前はポスターセッション的な発表であったが、今年度はすべての班で、パワーポイントを利用したプレゼンテーションを行った。
- ④ 行政などへの働きかけ：行政や団体などに働きかけることにより、協力してもらいやすい条件を整えた。特に市役所からの反響が大きく、準備段階から意見交換を繰り返し、強力なバックアップ体制を整えてもらうことができた。

4 多治見高校に活かせる点

沼津西高校の活動に関しての大きなポイントは、すべての分野の活動に行政が大きく関与しているという点である。校内だけの活動で終わることなく、行政に関与してもらうことで生徒は身近な自分自身の町の問題として捉え、考え行動できているように感じた。中にはプロジェクトで探求した活動にボランティアとして参加し続けている生徒もおり、企画が採用され新聞に大きく取り上げられたものもあった。行政その他の団体と連携するには、閉じた学校ではなく地域に開いた学校である必要がある。しかし関係機関が増えることで、日程調整などの教員の事務的な負担が増えることは違いない。この点は十分考えていかなければいけない。

5 その他

- ・静岡県の県立高校は校長・副校長・教頭の管理職3人態勢に変わりつつある。（副校長なしの学校は教頭が2人）
- ・生徒一人一人にUSBを配布し、そこに行事の感想など3年間の様々な活動の記録を保存している。そのUSBは家でも学校のパソコンでも使用可。
- ・県立学校では電子黒板化はまだ進んでいないが、今後静岡県の方針として電子黒板化に取り組むことは決まっている。
- ・県立高校では修学旅行先を海外にしている所が多く、行き先は台湾が多いとのことであった。沼津西高校は、以前はオーストラリア、7年前からはハワイにしているとのことであった。予算は現地3泊4日で生徒一人20万程度。
- ・人口減少が静岡県内も例外ではなく進んでおり、県立高校の統廃合が進む。沼津西高校も令和7年に近隣の学校との統合対象校として名前が挙げられている。



グラフや表を取り入れたパワポを作成し、発表していました

（文責：杉本・田並）

生徒によるサイエンスショー 第3弾

2月1日（土）に多治見市の養正公民館にて、ゼミの生徒6名がサイエンスショーの実演を行いました。小学生との交流も3回目となり、ほどよい緊張感の中で行うことができました。前回と同様、約20名の小学生の子どもたちを前に、実演やものづくりの指導を行いました。途中騒がしくなることがありましたが、困惑しながらも臨機応変に対応をしていました。年間を通した反省の中で、「小学校の先生の大変さが分かった。」「一方的に伝えるのではなく、相手のことを考えて伝えることが大切だと実感した。」などの学びを得ることができました。この経験を別の場面で活用したり、地域のボランティアなどに積極的に参加したりして、今後の人生に生かしてほしいと思います。

（文責：小澤）

サイエンスショーとガリガリプロペラの
ものづくり体験を行いました。



「TAJICON ハイスクール 見事グランプリ！」



2月1日(土)にセラミックパークMINOで行われた「TAJICON ハイスクール」にて、「多治見の街づくり活性化プロジェクトゼミ」の発表が5チーム中、見事グランプリを獲得しました。

TAJICON ハイスクールとは、多治見のビジネスプランコンテストの高校生版で、高校生たちが互いにビジネスプランを発表し合い、順位を競うものです。今年は、多治見西高校から3チーム、多治見工業高校から1チーム、計5チームで行いました。本校は、D組の勝陽介、梶田純矢、丹羽彩乃、E組の長江理香がパワーポイントと自作した作成物(地図やクイズの問題)を実際に見せながら発表をしました。

発表内容は、12月21日にながせ商店街で行った内容をビジネスプランとして発表しました。活動の様子(イベントを行う際の準備、概要、イベントの宣伝方法等)そして、当日の写真やイベントの結果商店街がどうなったのかを発表しました。審査員からは「とてもいいアイデアだった。」「この活動をこれからも継続して取り組んでほしい。」とのご高評をいただきました。

本ゼミは12月21日のイベントに向け、夏から準備を進めていく中で、この活動をもっと広く知ってもらいたいと思いTAJICONの出場を決めました。生徒たちは休日や放課後に学校やまちづくり株式会社の事務所で自主的に活動してきました。

ゼミ学習発表会

13日（木）に行われたゼミ学習発表会では多くの成果が見られました。11ゼミの代表がそれぞれの力を競い合い様々なジャンルの発表を展開してくれました。職員室へ戻ってきた先生方からも口々に好評価が聞かれました。今回の発表会を振り返り私なりの感想を紹介します。

まず第1に、生徒の司会が全体の前向きなムードをつくり出すのに効果があったと思われます。桑原先生が事前に心配して導入経緯の説明に来てくれましたが、そうした懸念は必要なかったと思います。発表者はメモを見て計画したとおりに行おうとするのでどうしても発表者自身の言葉から離れてしまいがちです。そのため質疑応答も限られた言葉や内容に偏ってしまいます。その点普段の言葉で語られたことが発表を身近に感じられる効果をもたらしたと考えられます。

第2に、発表のレベルの高さです。限られた時間内でパワーポイントを効果的に使い、的確で効率よく分かりやすい発表が多かったです。また、内容も様々な視点から指導がなされたことを窺えるようなものでした。指導教員だけでなく、他の教員や外部の支援者のアドバイスをうまく取り入れ、それぞれの生徒達が調べ考え工夫した軌跡が短い時間の中にも見て取れました。

ただし、もう少しプレゼンテーションの工夫をすれば、更に充実した発表になったのではないかと思える部分もありました。

例えば、「課題研究とサイエンスショー」ゼミの高山夏実さんの発表（写真右下）は、オリジナルな内容で分かりやすく説得力のある発表であると印象深かったです。しかし、アルミの屋根の形を何かに喩えてみたらもっと説得力が増したのではないかと考えました。

「**バイオミミカリー**」という学問分野があります。自然の形や成分・仕組みを工業や生活に活用しようという工学分野です。例えば、新幹線の先頭車両の形状がカワセミの形をヒントにしたということをご存じの方も多いと思いますが、現在、建築・土木・薬学・防災など様々な分野での応用が試みられ成功を収めています。

高山さんの発表も自然や生活の中で我々に馴染みのある形状に置き換えて発表がなされたら、もっと多くの生徒の発想力を刺激したのではないかと思えました。他の生徒の質問も本来はこうしたことを訊きたかったのではないかと思います。

2月27日の全校発表までに代表に選ばれた生徒たちのさらなる工夫を期待します。

（文責：教頭）



ゼミ学習全校発表会

先々週の学年発表会及びその後の生徒による評価を経て以下のように全校発表会の代表者が決まりました。前号でも紹介したように11ゼミの発表は例年以上に充実したものが多く、全校発表の選考にもれたものの中にも取り上げたいと思える発表がありました。こうした発表も含めて多くの生徒が来年度の入試や大学で今回の学習の成果が活用できることを期待します。また、1年生は初めて発表を見学する訳ですが、来年度自分たちが学習する際に良きモデルとなることは間違いありません。1年生の先生方はそのための動機付けを発表会の前後に確実に行っていただけるようお願いします。

ところで、今回の発表では「ふるさと教育」に関して活動したゼミが高い評価を得ました。例えば、土岐川の生態について専門機関の協力を得て調査・研究を行ったゼミ、多治見市のまちづくり株式会社との連携で商店街の活性化に携わったゼミ、養正小学校で小学校教諭の指導のもとに英語教育に取り組んだゼミ、養正公民館等で休日に小学生を対象に科学実験に挑戦したゼミなどです。こうしたゼミはテーマや内容もさることながら、発表に至るまでの実際の学習過程での調査・思考・討論などの学習方法が優れていたことも評価できます。専門家や地元の方々からの助言・指導を交えて調査をし、それを基に自分たちなりにアイデアや仮説を出し合って考え現地で検証するといった学習の基本が実践されていました。換言すれば、「インプット」と「アウトプット」のバランスの取れた学習活動であったということです。また、今回の地域課題探究型学習のテーマである「地域で学ぶ」に相応しい成果と言えるでしょう。

当日は生徒だけではなく、全員の先生方が参観して欲しいと考えています。来年度からは1年生の「総合的な探究の時間」で「学び方を学ぶ」の学習が本格化してきます。2年生のゼミ学習の指導の仕方や関わり方だけではなく、そこに至る1年生での準備や動機付けも重要です。また上記したように3年生での進路指導においてもこのゼミ活動は今後益々重要な役割を持つと考えられます。そうしたことへのご自分の意識付けのためにも一人一人の先生方が関心を強くしていただきたいです。(文責：教頭)

日時) 令和2年2月27日(木) 13時30分～14時20分 本校体育館

発表内容) ※ 1発表7分程度の予定

ゼミ名	内容・テーマ	発表生徒
課題研究とサイエンスショー	風の強さに最も耐えられる形状	高山夏実
世界史の視点から考える	沖縄戦と哲学思想	櫻井朱里、小林莉緒
町づくり活性化プロジェクト	ながせ商店街を盛り上げるための実践	杉山樹、加藤夕葵、谷脇柚月、鈴木優介
プロジェクトX 土岐川	高校生にできる小さな自然再生を通じた川づくり	鵜飼健太、佐藤智哉、虎澤陸、志津隆行

第2回ふるさと教育協議会の報告

2月27日のゼミ学習の全校発表会を受けて、第2回ふるさと教育協議会が行われました。外部の参加者は全校発表会でも講評をいただいた名古屋学院大学学長の小林先生、多治見市役所の水野琢也さんでした。

今回のゼミ学習に関して委員の方からは以下のようなコメントをいただきました。

- もっと多くのゼミで地域学習に関わる取組があると良かった。例えば、修道院でカトリックの言葉を知る取組とか健康・コーチングでも地域の施設・団体と関わることも面白い内容となったのではないかな。
- 「高校生と関わりたい」と思っている地元の大人は多い。市役所や公民館などの公的機関だけでなく地域の優良企業との関わりも模索して欲しい。
- 大学コンソーシアムで協働プロジェクトが模索されている。瀬戸市では役所から大学生に考えて欲しいテーマが与えられ取り組んでいる。そうした活動もコーディネートできる。
- 書店やまなびパークなどとコラボしてみてもどうか。高校生の推薦する書籍などを紹介するイベントやコーナーを設けると効果的ではないかな。
- 「高校生のたまり場」が必要ではないかという声がある。駅周辺の再開発や本町跡地の活用などに関連して高校生を活用しようという問題が検討されている。
- 多治見には元気な大人が多い。しかも有言実行で、よく語るが口だけではなく実現に向け動こうとする大人が多い。そういう人々を活用する手もある。
- 人材派遣やコラボだけではなく、指導教員のための相談にも協力したい。多治見西高校も同様の取組を行っているが、3月から4月に希望調査をして希望に応えたい。

また、全体発表会での小林先生の高山夏美さんの発表（「風の強さに最も耐えられる形状」）に関係したコメントで、「沖縄の屋根に注目したまとめは良かったが、もっと広く具体的なイメージがあるとなお良かった」に関して、「生徒の感性を掘り下げよう取組が必要と思う」と質問したところ、先生からは「総合的な学習の時間は教科の論理や内容から出発するのではなく、生徒の生活や感じ方から疑問を発生し追究していくところに面白みがある。その疑問に答えが出せなくても、生徒が学ぶ楽しさを実感できれば良い」という趣旨のご助言をいただきました。そのためには、「教員が学ぶ楽しさを体現して生徒に示すことも大切」ともご指摘いただきました。

協議会後に児玉先生とそのことについて雑談をする中で、児玉先生が年度当初「ブラ多治見」ゼミを企画した理由を話してくれました。それによると、「本校に初めて来たときに下に大きな広場（湧水公園）があることに疑問を持った。そんな単純な疑問を生徒と一緒に探したいと思った」とのことでした。この疑問は地理や地学の知識を駆使すれば生徒でも答えを見出すことは可能なのですが、こうした視点を我々が常に持つことが大切なのだと思います。普段気にしていなかったことに意外な「学習の種」が転がっているかもしれない。そしてそこに焦点化することで生徒の学習動機やメタ認知を刺激する可能性があると言うことです。就中、そうしたアプローチが「社会に開かれた教育課程」を実現する第一歩だと考えます。（文責：教頭）

生徒の振り返り&レポートより

全校発表を終え、生徒の自己評価をまとめました。

最も顕著だったのは、「学習の深まり」という項目で、「独自に考察できた」と答えた生徒が全体の46.7%から81.3%まで上昇したことです。やはり、実際に試してみること、校外の人からの反応を得ることが、学びの実感として残ったのだと思います。

文献研究を中心としたゼミでも、「今回で初めて専門的なことを調べたが、まず参考文献で使われている言葉を自分の中にかみくだいて理解しなければならず、関連性のあるものをまとめることが難しいと感じた。また、いろんな文献の中から必要などころを見極める力が必要であると感じた。」と振り返り「独自性」についてきちんと向き合うことができました。

コンテストやこれまでの通信に掲載がなかったゼミにも地域と繋がるものがありました。

- ◆「動作解析を用いたコーチング」ゼミでは、スポーツをコーチングという立場から客観的に捉えることにより、「なぜ先生に注意されるのかがわかった。」と振り返るだけでなく、将来的に地域のスポーツ指導者として成長できそうな視点から考えを深められていました。
- ◆「健康・福祉・医療」ゼミでは、多治見市ハッピープランをゼミに上手く活用し、保健センターとの連携による活動を行うことができました。既存の活動を効果的に組み合わせて連携をするという柔軟な発想により、生徒が体験を楽しみ、活用することができました。
- ◆「ことばの魅力」ゼミでは、「少納言」というウェブ上の言語検索サイトを活用し、生徒の研究に役立てることができました。これも担当の教員が大学で学んできた研究手法を活用できた例の1つです。これを用いて、ことばの中でも、方言に注目した生徒もいました。
- ◆「English & Education」ゼミでは、今年初めて養正小学校との連携をしてみて、授業内容が細かく文部科学省によって決められていることや、英語専門の先生が少なく、指導することに不安をもっている先生が多いこと、それゆえ、高校生との連携に高い関心を持ってもらえたことなどがわかりました。来年度、スピーキングテストで小学生に評価をつけなければいけない為、テストを受けていない児童の待ち時間を使って高校生が授業を担当するなど、効果的な連携の形が見えてきました。

多様な学部学科があるように、多様なゼミの形があると思います。どのゼミにおいても、生徒はいろんな発見をすることができました。担当して下さった先生方本当にありがとうございました。

(文責：桑原)



English & Education ゼミ
養正小学校での活動の様子

